

ゾラについて

岩渕邦子

Kuniko IWABUCHI

外国語教育講座

第I章 普仏戦争前後

退職による経済的困難

1866年の年末、ゾラはとりわけ経済的に追い詰められていた。当時26歳であったゾラは実はその同年の初頭、大手出版社アシェットを退職していたのであった。それは、ゾラは文筆により生活を立てていく上でアシェット社で掴むべきものは掴んだと判断した為であった。アシェット社で占めていた大手出版会社の宣伝係長というポストのお蔭で彼はジャーナリズム界は勿論、文学界、学会にも人脈を広げることが出来、又時代が要求している文学の方向性をも把握できたと確信していた。生活費については、日刊「エヴェヌマン」紙の社主、ヴィルメッサンがアシェット社退職後の彼を、高給をもって迎えてくれるというので何の心配も要らないと思われたのであった。¹

ヴィルメッサンの指示のもとに新刊紹介を担当し、滑り出しは上々であった。しかしその後担当させられた官展評、ゾラ自身の作品の紙上連載の試みはともに上手くいかなかった為ヴィルメッサンの不興を買って同年11月3日にはゾラは解雇されてしまった。²「エヴェヌマン」紙自体も政府に睨まれて同年11月15日に廃刊となり、後続の「フィガロ」紙ではゾラはフリーライターとしてしか関わられなかった。以上のような事情により安定した収入が無くなってしまった為家計は忽ち行き詰ったのであった。

1866年の年末には後の『テレーズ・ラカン』のラフスケッチに相当する「愛の結婚」を発表したので、ゾラとしては後はこれを書き込んで長編にする心算であった。しかしまずは収入の不安を解消しなければならなかった。そこへタイミング良く安い稿料ながらゾラを指名しての仕事の依頼が舞込んで来たのであった。

マルセイユの某紙の社主、アルノー³がウージェーヌ・シューの『パリの秘密』(1842-1843)がかつて収めた様な大成功の夢の再現を狙い、『マルセイユの秘密』というタイトルもあらかじめアルノー自身が決め、その上必要な資料を全て揃えた上での依頼であり後は作家の力量を発揮してしかるべき作品に纏め上げ

てくれというものであった。一行につき2スウという低い稿料でもあり、資料の山から諸事項を抽出してストーリーを編み出すという創作方法自体が自分には合わないものと感じてゾラは初め乗り気ではなかったのであるが毎日の食費の捻出にも苦勞するという当時の経済的苦境もあってその仕事を引き受けることにしたのであった。

二種類の執筆方法

このようにして1867年、ゾラは毎日二つの作品を異なる二つの執筆方法で書き分けるという試みに取り組んだのであった。『テレーズ・ラカン』の方は、ゾラが当時理想としていたゴンクール兄弟の『ジェルミニ・ラセルトゥー』レベルの作品に仕上げたかったので、心身のコンディションが良く頭の冴えている午前中いっぱいその執筆に充て、『マルセイユの秘密』の方は最初から生活費を稼ぐためのやつつけ仕事と割り切って、午後の時間帯にしかも一時間のみ執筆することにしたのであった。

後年、1884年にシャルパンチ書店がこの『マルセイユの秘密』の再刊を企画したことがあった。ゾラはその校正刷りを読むことで過去の自分の作品と再対面したのであった。そして『マルセイユの秘密』に採用した執筆法(＝一纏まりの資料の山からストーリーを捻り出す、しかもそのことに最小限の時間しか割かない)こそが1884年時点における、すなわちルーゴン・マッカール叢書の諸作品を生み出していく際の方式となっていることに気付いたのであったという。つまり過去のある時点でゾラは、やつつけ仕事の方に適用していた執筆方法の方を選び取っていたということになる。

それはゾラがフロバールやゴンクール兄弟を尊敬すべき先輩として仰ぎ見つつも、ある違和感を拭き切れなかったことと関連があったといえる。その違和感とはつまり、用心深く疑り深い第二帝政が安心して微笑みかけ、その最上の部類のサロンに招き入れる、といった恩典をフロバールやゴンクール兄弟に与えていたということに関するそれであり、又そのことを彼等が有難がり且つ誇りにしているらしいことに対するそれ

であった。彼等が第二帝政に寄せているらしい支持と愛着に関してもゾラは違和感を抱いていた。そしてその様な彼等にしてはじめて可能な執筆方法、すなわち経済的にも時間的にも恵まれているがゆえに時間など気にせず好きなだけ推敲を重ねたり、表現法を工夫したりするやり方なども考えてみれば、当面金とも暇とも縁が無いゾラ自身にとっては所詮無縁のものなのである。それはアシェット社退職後、ゾラが陥ってしまった赤貧状態が気付かせたことであり貧窮の恐怖に背を焼かれながら彼が考えたことであっただろう。

思うに問題だらけの社会事象を描くのにフロベールやゴンクール兄弟は果たして適任と言えるのだろうか。ナポレオン三世の姪であるマチルド公爵夫人のサロンに常連として招かれ上流人士と交わる、そのことを誇りにし無邪気に喜んでいるフロベールやゴンクール兄弟に... 第二帝政にさしたる不満も感じていない彼等に、まさにその第二帝政という政体が生み出している様々の法律や社会の仕組みによって苦しめられている庶民の気持ち理解できるのだろうか、自分には出来る。自分は庶民と同じ苦境に立たされているから。第二帝政に認められ、それが差し出す恩典に気分を良くしそれで現今の体制を容認しているフロベールやゴンクール兄弟には見えない *réel*, 見えても書けない *réel* を自分こそが書いてやろうじゃないか、執筆方法も今の自分に最適なものを編み出せばよいのだ。そうして構想されたものがルーゴン・マッカール叢書であり、当該叢書に見られるゾラ独特の文体なのだと思う。

ゴンクール兄弟への評価の変化

1865年、『ジェルミニ・ラセルトゥー』が発表された当初は、これこそ待望の新時代の文学と大感激し作者であるゴンクール兄弟を褒めちぎっていたゾラが、⁴ 1868年9月22日、「ゴーロワ」紙に載った評論、「エドモン及びジュール・ド・ゴンクール両氏」に於いては一転してゴンクール兄弟についてひどく辛口な見解を述べている。それはゾラが1866年の年末以降、経済的な苦境に喘ぐ中でそれまでには無かったある認識、上述した様な認識に達した結果と思われる。

上記、辛口評論の中でゾラはゴンクール兄弟が羨むべき金利生活者であることを暴露したり、傑作、『ジェルミニ・ラセルトゥー』にしたところで、そこには庶民と同じ視点に立とうとする姿勢が感じられない、かえって「手に香水を振り掛け、白手袋をして...」⁵ に象徴される様なゴンクール兄弟の貴族的な冷たさ及びディレタンティズム、薄汚い庶民などと直接の関わりを持つことなど御免蒙る、自分達は単に庶民の病的で悲惨な事例が好奇心をそそるので書くに

過ぎない、といった態度。それは生身の人間を扱う態度というよりゴンクール兄弟に共通の趣味、骨董品珍重に於いてこそふさわしい態度なのではないか等々のことが書き連ねられている。⁶

1868年9月といえば第二帝政も末期に差し掛かる時点である。この頃ゾラは生活苦に迫られて売文稼業に励まざるを得なかった。そしてその中でゾラは内なる共和主義思想を先鋭化させていった。第二帝政末期のゾラについてはミッテランも次のように述べている。

ゾラの極左的意見の進展は1869年の末から速くなり引き返しの出来ぬものとなる。⁷

同1868年12月4日、上述の辛口評論で見せたゴンクール兄弟への鋭い批判とは裏腹に、ゾラは彼等に弟子らしい礼儀を尽くして訪問し、十巻で構成する『ある家族の歴史』、つまり後のルーゴン・マッカール叢書の目論見について報告している。それがしっかり金策と結びつけられているのが如何にも赤貧の渦中に居たゾラらしいところであった。

ゾラは向こう6年間自分を3万フランで買い取ってくれ、つまり毎年当たり5000フランの定収入があるようにしてくれ、上述の『ある家族の歴史』を書き上げさせてくれる出版社の出現を乞い願っていることをゴンクール兄弟に語ったりしている。⁸

五人の会

ゾラが1869年11月28日の「トリビューン」紙に書いた『感情教育』評がフロベールの心象を良くし、そのことでゾラは同年12月12日、初めてフロベールの日曜午後の会への出席を許され、以後その会の常連となる。それがゴンクールの日記で「五人の会」と呼び習わされている例の会であり、フロベールを中心にゴンクール兄弟（但し、弟のジュールは1870年に死去する）、ドーデ、ゾラがメンバーであった。又、ロシアのツルゲーネフもこの会の常連であった。（ツルゲーネフはフロベールの国境を越えた親友であったという⁹）

ゾラは「五人の会」の常連となってからツルゲーネフと知り合ったのであった。両者の初顔合わせは1872年のことであり、当時ゾラは32歳、ツルゲーネフは54歳であった。それは上記のゾラの初回参加の年、1869年からみて時間的に間隔が空き過ぎているように思われるが、実はこの間に普仏戦争、パリ・コミュン等が介入しているのである。

この会においてもゾラは機会を捉えては自分の経済的苦境を訴え続けたのであった。ゾラは自分の家庭の為の経費の他に父母が南仏エクスに残した莫大な負債

についても返済の義務を背負い込まされていたという。¹⁰

自身、人道的心情に溢れるツルゲーネフは、民主的、共和的な見地から大衆の側に立ち果敢に健筆を振うゾラが大いに気に入った様子であったという。¹¹ 彼はゾラが盛んに訴える経済的苦境に同情し、生活費の一助にでもなればと、ゾラをロシアのジャーナリズムに売り込む労までとってくれたのであった。このとき、ツルゲーネフが頻繁にフランスを訪れ、パリ駐在の文学大使の如き役割を果たしていたことが大いに幸いしたという。

ツルゲーネフの尽力は功を奏し、お蔭でゾラはロシアの「ヨーロッパ通信」¹²に「パリ便り」を掲載する機会を得たのであった。それは1875年3月から1880年12月まで約6年弱にわたって続いたのであった。この間ゾラは劇評、作家・作品紹介、美術評、風俗、政治、学会情報、自然主義文学論等、多分野にわたるテーマで64篇の記事を書いたという。又、『アベ・ムーレの罪』の連載を行ったこともあった。¹³

ここで、ツルゲーネフのタイミングの良い尽力があったからこそゾラは精神的にも金銭的にも危機を脱することが出来、それがひいては1877年の『居酒屋』の大成功にもつながったことを指摘しておかなければならない。¹⁴

どん底の1874年

1870年9月、第二帝政が崩壊した。臨時政府の主席はティエールが勤めた。ティエールのもとで共和制が発足したが1871年2月の選挙の結果、王党派が議会の絶対多数派を占めるに至った。ティエールはパリ・コミュン（1871・3・18～1871・5・28）に対する流血の弾圧などゾラとしては支持できない面もあったが王党派の天下になるよりは少なくとも共和制を志向しているという点だけでもティエールを支持したい気持ちであったようである。¹⁵ そこでゾラはせめてペンの力で王党派の伸張を阻みたく思ったのであろう、王党派の有力政治家を複数、実名で出す効果満点の政治パンフレット、「キャバレ」、「危機のあくる日」を相次いで書き「コルセール」紙に載せた。（1872年12月17日；12月22日）¹⁶

それらが王党派による、ティエールの失脚を狙った政治的陰謀を余りにも見事に暴露するものであったので彼等の逆鱗に触れ、「コルセール」紙は「危機のあくる日」を掲載した翌日、直ちに発行禁止の処分を受けてしまった。これを見て中央の新聞雑誌は「コルセール」紙と同じ目にあっては大変と、こぞってゾラの記事の掲載を拒むようになってしまった。

ゾラの売文稼業はこうしてたちまち成り立たなくなってしまった。1874年が最悪であった。アルコールの勢いも手伝ってゾラが「五人の会」でその経済的苦境を洗いざらい吐き出した様子がゴンクール日記の1875年1月25日の記載に見られる。当日フロベールは病欠であったらしいが、残りの四人だけながら会は盛り上がった。当夜、ツルゲーネフが盛んに愚痴るゾラを慈父のような目で見守っている情景が日記に描写されており、ツルゲーネフの暖かい人柄がよく伝わってくる。又長年、赤貧に喘ぎながらも着実な前進を止めないゾラは今や脅威を与える成長株となり、そのようなゾラを底意地の悪い目で見つめるこの時期のエドモン・ド・ゴンクールは、かつては不動のものであったその自信とゆとり、ゾラに対して師匠格を自認するが故に有していたそれを失くしかけていたのかもしれない。

第Ⅱ章 成功と挫折

1877年の成功

1877年、ルーゴン・マッカール叢書の第7巻『居酒屋』が最初の成功作となり長年ゾラを苦しめていた経済的困難は一挙に解消され、フロベール、ゴンクール、ゾラ相互間の関係も一変してしまった感がある。

フロベールはゾラの才能を認めつつも相変わらず次に見るような不満を抱き続けていた。

単に見るだけでなく、見たものを整え融合する必要があります。私の考えでは現実はまだ踏切り板に過ぎない筈です。ところが我々の友人たちは芸術はただそれだけで構成されていると思い込んでいます。¹⁷

この様なことをツルゲーネフ相手に愚痴っていたフロベールも1880年5月8日に死去し、フロベールという中軸を失ったため「五人の会」も解消に向かった。更にその3年後ツルゲーネフもこの世を去った。

1868年には「我々の賛美者であり弟子であるゾラ（...）」¹⁸と、その有名な日記に記すことの出来たゴンクール兄弟であるが、1870年6月20日に弟のジュールが早世してしまう。

ひとは好きなだけ我々を否認するがいい・・・だがいつかは我々が『ジェルミニ・ラセルトゥー』を作ったこと、しかもこの作品が我々より後に写実主義とか自然主義とかの名によって制作された全てのモデルとなった典型的作品であることを認めねばなるまい。¹⁹

これはジュールが自分の死が間近に迫ったことを意識しつつ述べた言葉といわれるが、それは其のまま兄、

エドモンは確信でもあった。エドモンはジュールの死去に臨み立ち直れないほどであったという。小説及び日記の共著者としてその死は深刻な痛手であり、一時は日記の中断も考慮した程であったという。しかし彼はこの不幸を乗り越えゾラの当たり年、1877年にはゾラに対抗するかの如く『売笑婦エリザ』を書いている。その後もゾラへの対抗心は執拗且つ旺盛で、それは彼が最終的にアカデミー・ゴンクールのリストからゾラの名を外してしまったことなどにも伺える。²⁰

エドモンはその晩年にはジャポニスムにのめり込み浮世絵に詳しい林忠正という、ジャポニスム研究上理想的な友人兼忠告者を得たことも幸いし『歌麿』(1891)、『北斎』(1896)を書き残すことが出来た。エドモンの名はジャポニスムへの貢献の大きさによっても有名である。²¹

『大地』で集中攻撃を受ける

ゾラは『大地』(1887)で墓穴をほった、とはよく言われることである。しかしそれはゾラ自身の落ち度というよりは時代状況の変化によった、ある意味では不可抗力的なものであった、という方が妥当すると思われる。

1880年代のフランスは、思想状況としても丁度世紀末の反動時代に差し掛かり、ドイツ観念論の系統を引くショウペンハウエルやベルクソンの哲学が異常なまでの人気を博し、更に世紀末病の一種として、デカダンスやペシニスムの気分が国中に蔓延していた。そこにカトリシスムの復興がさざし、それら諸要素が絡み合い一塊りとなって実証主義思想を押し潰し、科学を疑わせ、それらに立脚する自然主義文学をも同時に破産させ衰微させたのである。そして早くも次の新たな潮流が出番を待ち望んでいたのである。

その様な時機に刊行されたゾラの『大地』はあらゆる方面から集中攻撃を浴びる形となってしまった。すなわちかつては自然派に属していた青年作家たちの離反が見られた(=「五人の宣言」)。「両世界評論」の主幹、ブリュンティエールは「自然主義の破産」を書いて更なる追い討ちを掛け、アナトール・フランスは「タン」紙上でゾラの最新刊、『大地』を罵倒したのであった。このような情勢の中で、ゾラ自身もその晩年に特徴的な理想主義的傾向に転じてゆくのが見られた。²²

『大地』を評価していたゴッホ

ゾラの『大地』が作品自体としてはなんら非難されるべきものではなかったことについては、それがかのゴッホ(1853-1890)によって高く評価されていたことによって理解されるだろう。実弟、テオへの手紙によって彼が優れた文章家でもあったことは今日よ

く知られているところである。又非常な読書家で教養人でもあったらしく、テオの『英文学史』や『芸術哲学』等も読みこなしていたようである。『大地』はその様なゴッホの鑑賞に堪え更に愛読されたのである。

1888年8月、つまりゴッホが南仏アルでゴーギャンと共同生活をしていた頃、彼がテオに書いた手紙の中には次の様な一節が見られるという

僕らはゾラの『大地』と『ジェルミナール』を読んだ。そこで僕らが農民を描く時には、この読書がいくら僕らの血肉と化してしまっていることを示したい。²³

ゾラが集中攻撃に晒されていたこの時期にこうしたゴッホの言葉は珍しい類いのものであったと言える。ゴッホが初めて読んだゾラの小説は『愛の一頁』(1878)であり、それは1882年のことであったという。当時彼はオランダのハーグに居て、娼婦シーンと同棲中であつた。ゴッホは作品中の大都市パリの描写に惹かれたという。以来彼はゾラの作品は、新作が発表されるごとに買い求めて読む良き読者になったらしい。ゴッホは、『わが憎しみ』所収のゾラが26歳當時に書いたサロン評や「芸術家テオヌ氏論」等にも目を通していたようである。

ゴッホはゾラが描く農村の数場面は「ミレーの絵の様に美しい」と感じていたという。ミレーはゴッホがレンブラント、ドラクロワ、コロー、クールベ、ドーミエ等とともに私淑し、繰り返しその作品の模写を重ねていた画家の一人であつた。ゾラもミレーを「わがサロン批評」(「エヴェヌマン」紙、1866年5月15日)で取り上げ、ミレーの絵に「ひとえに現実のみからなるその詩情」²⁴を見出して感心し、テオドール・ルソー級の大家と見做す高い評価を与えていた。しかし残念ながらゴッホはゾラのこのサロン評は見落とし、ゾラがミレーを無視していると思い込んでいたらしい。

ゴッホが抱く田舎への愛着は次の引用文に窺える。

幼い頃自分が育てられた田舎が嫌いでない(…)そして種蒔きや麦束は今でも昔のように魅力があり、過去の思い出をよみがえらせる永遠の瞳でもある。²⁵

ミレーの『種蒔く人』を正に彷彿とさせる農作業そのものの丁寧な描写で始まる『大地』は、農村の人間及び人間関係や広々とした田園風景の叙述に富みゴッホの郷愁を誘ったことであろう。更にゴッホは、アナトール・フランスを激怒させた『大地』のいわゆる不道徳性や猥褻性につまずいた気配もまるで無い。それ

はゴッホが人間の生理を至極自然なものとして受け入れていたためと考えられる。彼は「人間は二足獣なり」²⁶と割り切る近代人であったのだ。

第三章 ゾライスム

ゾラの小説論

先輩格の諸作家は勿論、同輩のドーデも又ゾラを慕い寄って来た筈の弟子と呼んでもよい作家たちも『実験小説論』(1880)には賛同せず機会を見つけては彼から離れていった。『実験小説論』は当初、例のロシアの「ヨーロッパ通信」に発表したものであるが、後年自分がリーダーと見做される様になったフランス自然主義文学の一層の隆盛を願い、あらためてマニフェストとして自国内に公表したものなのである。思えば小説論を展開するのに逐一クロード・ベルナールの『実験医学序説』を下敷きにしたそのやり方がまづかったであろう。実際この「実験」にブリュンティエール等々が噛み付いたのであった。「実験」と言ったところで要するに全ては作者の心中でなされる想像上での諸操作に過ぎない、というわけである。

『実験小説論』として彼が発表したものは、実はゾラ自身はすでに1865年段階で自分独自の小説論としてはほぼ固めていたものであり、実際彼はそれによってルーゴン・マッカール叢書の諸作品も含め、以降の作品を書き継いで来たのであるからいわば実証済みの小説理論と言え、それ自体に何の問題もある筈は無かったと思われるのであるが・・・

更にもう少し詳しく見てみるとゾラの小説論の根底をなしているのは『英文学史』で名高いテヌの文学についての考察に学んだものとなっている。テヌはその考察をシェイクスピアの作品を吟味しつつ行ったのであった。シェイクスピア作品の凄味はシェイクスピアの人間観から発する、とテヌは考えた。テヌが把握したシェイクスピアの人間観とは次の引用に見る様なものである。

(...)人間には自らの知性をつねに正しく自らの行動をつねに良識的に保つ永続的なはっきりした力はない。それどころか、彼は生来非合理的で間違いやすいものである。人間の内部の機関からくりを構成する諸部品は、さまざまな衝動や重圧によっていつも勝手に盲目的にすすむ時計の歯車仕掛のようなものだ。この歯車仕掛はときにうまく調和して正しい時刻を示しても、自然に自発的にそうなるのではなく偶然や、人が苦勞して調整してはじめてそうなるのである。しかもそれは確実ではなく、やがてまた狂うだろう。人間の頭脳ブレイブに生起する諸観念(思想)もそれに似て、それぞれに勝手に盲目的にすすむので、その均衡は不完全でたえず今にも破れそうだ。(...)人間の危険な原始的な諸勢力は、

それらを抑制するかのような秩序の下でも、征服されずに独立して存在しつづける。そこで大きな危険が出現したり、革命が勃発したりすると、それらの原始的な諸勢力は昔と殆ど同じように凄まじく爆発するのだ、というわけは観念とは無気力な協調的なものではないからだ。観念は悪夢や奇癖や非常識の素であり、拡大するとその人間の全体を捉え揺さぶり消耗する。そこで結局人間はそれらの性急な衝動や群がりおこる想像の連続にはかならず。・・・動揺、衝突、興奮、たまにおこる一種の一時的な平均、それこそが人間の真の生活、即ちときどきは理性をよそおうが、本当は彼の夢とおなじ実質の狂気じみた生活である。そしてこれこそシェイクスピアが理解したような人間なのだ(・・・)²⁷

又テヌは小説の素晴らしさを損なうものが何であるのかを、たとえばサッカレーの作品を引合いに出しながら示している。

サッカレーは作品の面にしょっちゅう介入して、学校の生徒にでもあたえるような陳腐な道徳のお説教を濫発し、読者の感興をさまたげ、芸術としての小説を甚だしく害する。そのために人物たちは生きた存在ではなく、あやつり人形になってしまう。彼は彼らに滑稽さや嫌らしさや失望をあたえることだけを旨として、彼らの行動をくみあわせる。そこでいくつかの場面がすぎると、読者はそのばね仕掛がわかり先きが見えて幻滅する。現実の生活の事件や感情は、これほどわざと仕組まれた対比やこれほど巧みな組合せを形づくるようにはできていない。自然は決してこのようなお芝居ごとを作りださない。²⁸

つまり小説家はサッカレーとは逆のいき方、すなわち客観主義リアリズムに徹するべきことをここで示唆しているのである。更にテヌは次のように言う。

小説家とはなにか？私見によればそれは心理学者であり、自然に無意識に心理学を実行にうつす心理学者である。それ以下でも以上でもない。彼はさまざまな感情を想像し、それらの係わり方、それらに先立つものや続くものを感じるのがすきで、この楽しみを自分にあたえる。(・・・)だがそれらの感情が正しいか正しくないかはあまり気にかけない。(・・・) 真の画家は、がっしりと付いた腕やたくましい筋肉がたとえ人を打ち殺すのに使われようと、それらを喜んで見つめるものだ。真の小説家は有害な感情でもその偉大さや、悪質な性格でもそのよく整った機構からくりを、つくづく眺めて楽しむものだ。・・・小説家は人物の諸感情を、非難もせず 罰しもせず、毀損もしないで、あるがままに全的に示すものだ。彼はただそれらだけをそっくりそのま

ま読者にうつし、それについていように判断する権利を読者にのこす。²⁹

真摯且つ勤勉な小説道探求者であったゾラはテーマの小説理論に学んだもの、諸先輩作家の実作品から学んだもの等を全て積みあげていった。そして総仕上げとしてゾラ独自の持ち味といえる、瞳目すべき発展を遂げている‘科学’への憧憬と感激がプラスされる……そうして成立したものが『実験小説論』なのである。

実験的モラリスト

「人間は遺伝、生理、環境に規定される動物的なものである。宗教や道徳が否定しあるいは罪悪視する人間のこの動物的な側面を避けるのではなく、むしろそれを明らかにしてこそ人間の改善進歩がある」³⁰とする自然主義文学は丸ごとの人間の理解を目指す。

‘モラル’の過度の重視はまず第一に人間理解の片手落ちになりかねない。加うるに教会ののさばりをまたまた赦してしまうことにつながりかねない。共和主義者のゾラはカトリシズムへの警戒心を絶対に解こうとしない。‘理想’重視は‘事実’抜き、の空理空論の罠に陥りかねず是もまた多分に危険である。ゾラは1848年の苦い経験も又絶対に忘れない。1848年の2月革命に引き続き政治舞台で共和党は折角、政権政党になりながら‘事実’に基づかず、‘事実’の教訓に盲目であり又耳を貸そうともしなかったためにナポレオン三世に敗退し、ナポレオン三世の第二帝政をゆるしてしまうという愚を犯してしまった。他方、‘科学’の歩みを見詰めてみると‘科学’は‘モラル’、‘理想’に拘泥することなくコツコツとひたすら地道に事実を観察し、分析し、実験し、そのことにより物理、化学、医学等々の分野で‘真理’を発見しそのことが新技術獲得を可能にし、それらを現実に応用すると i) 教会の教義の嘘を完膚無きまでに論破し、ii) 今まで不治と見做されてきた諸業病を克服することを可能にし(=医学、薬学の進歩、手術の進化等々)、iii) 生活は従来とは比べものにならないほど便利で快適になり(=工場制生産、交通網及び電信電話の発達等々)、結局、人々の意識も見事に変えてしまった。

これら‘科学’が示した成果の素晴らしさを見てゾラは科学こそが社会を改変させてゆく鍵を握っていると確信し科学に魅了されてしまったものと思われる。このように多方面に有効であった科学の力を考えるならきっと文学分野においても科学的手法は大貢献をするに違いない、こう考えてゾラは新時代に即した新文学を構想し‘自然主義文学’を打ち出してゆく。ユゴーの如く‘詩人の夢’に終始するロマン主義文学では社会悪に対抗することは出来ない。自然主義文学が

フランス社会の事実をつぶさに且つ徹底的に調べあげるなら共和主義の発展に貢献できる筈なのである、とゾラは考えた。

自然主義文学に於いては従来詩人に不可欠とされた靈感すら無用と思われる。事実に関する資料収集、次いでそれらに基づく観察、分析という科学者と同じ仕事を粘り強く続行し積み上げてゆけばよいのだ。こうしたゾラの考えはルーゴン・マッカール叢書の諸作品の中で実行された。ゾラは批判や主張を留保しつつ社会のある断面を客観的に描くことに専心した。出来上がった作品自体から彼の意図したモラルも批判も主張も出て来る筈とした。

それは浅薄な理解というべきなのであるがゾラはよく露悪趣味、露出趣味を疑われる。このようなゾラへの無理解は時にゾラの書籍を扱う書店主にまで及ぶことがあった。いわゆる‘モラル’が厳しかった時代のイギリスのヘンリー・ヴィゼッテリーの場合はその一例である。彼はゾラを知る某仲介者の世話で1884年以後継続的に多くのゾラ作品の英訳版を出版していた。このことで彼は1889年、猥褻文書出版の告発を受け、3ヶ月の禁固刑を科されてしまう。そして出獄後まもなく死去したのであった。その息子がアーネスト・ヴィゼッテリーであり、彼は実父が蒙った不幸な例にもめげず、ゾラ作品及びゾラへの理解をイギリス中に行き渡らせる上で最も功績のあった人とされる活躍を翻訳、解説の両面で意欲的に行ったのであった。ゾラ文学の倫理性を深く理解していたからこそ出来た活躍であったといえるだろう。³¹更に付言すべきは彼は又、ドレフュス事件でゾラがイギリスに亡命した時親身にゾラの世話をしたことである。³²

註

- 河内 清『ゾラと日本自然主義文学』梓出版社、1990年 p. 65
- 同 p. 66
- マルセーユの「メッサージュ・ド・プロヴァンス」紙の社主レオポール・アルノー
- 1865年2月24日号の「サリュ・ピュブリック」紙に掲載された「ジェルミニ・ラセルトゥー論」にて
- 「彼らは手袋をはめ手に香料をつけないでは人間の腐敗を探索することは出来ない。彼らのうちには泥土のまっただ中にまで下りる厳しい観察と、不潔な傷痕をえがくために使う文句を念入りにごてごてと飾りたてるけちくさい先生とがいる。『ジェルミニ・ラセルトゥー』は白手袋で行われた愛の臨床講義の一例である。彼らは理屈では悪臭をおそれないが、本能では芳香を愛する勇敢な人として現実に立ち向かっているのが感じられる」
- 河内 清『ゾラとフランス・レアリスム』東京大学出版会、1975年 p. 74
- Henri Mitterand: Zola journaliste, p. 115
- 河内 清『ゾラとフランス・レアリスム』東京大学出版会、

- 1975年 p. 66
- 9 河内 清『ゾラと日本自然主義文学』梓出版社, 1990年 p. 89
- 10 同 p. 74
- 11 同 p. 90
- 12 *Vestnik Evropy* (フランス語名 *Le Messenger de Europe*)
- 13 河内 清『ゾラと日本自然主義文学』梓出版社, 1990年 p. 91
- 14 同 p. 93
- 15 同 p. 73
- 16 これら政治パンフレットに見られる政治記者としてのゾラの炯眼ぶりはその後の事態の展開によって証明される(参照同p. 80)
- 17 同 p. 93
- 18 河内 清『ゾラとフランス・レアリスム』東京大学出版会, 1975年 p. 65
- 19 同 p. 79
- 20 同 p. 84
- 21 渡辺一夫, 鈴木力衛『増補 フランス文学案内』岩波書店, 1990年 p. 192
- 22 河内 清『ゾラと日本自然主義文学』梓出版社, 1990年 p. 118
- 23 同 p. 117
- 24 同 p. 121
- 25 同 p. 123
- 26 同 p. 126
- 27 同 p. 188 - p. 189
- 28 同 p. 193
- 29 同 p. 192
- 30 同 p. 206
- 31 同 p. 208 - p. 209
- 32 アーネスト・ヴィゼッテリーの主著:
i) *With Zola in England* (1899))
ii) *Emile Zola, Novelist and Reformer* (1904)

(平成17年9月16日受理)